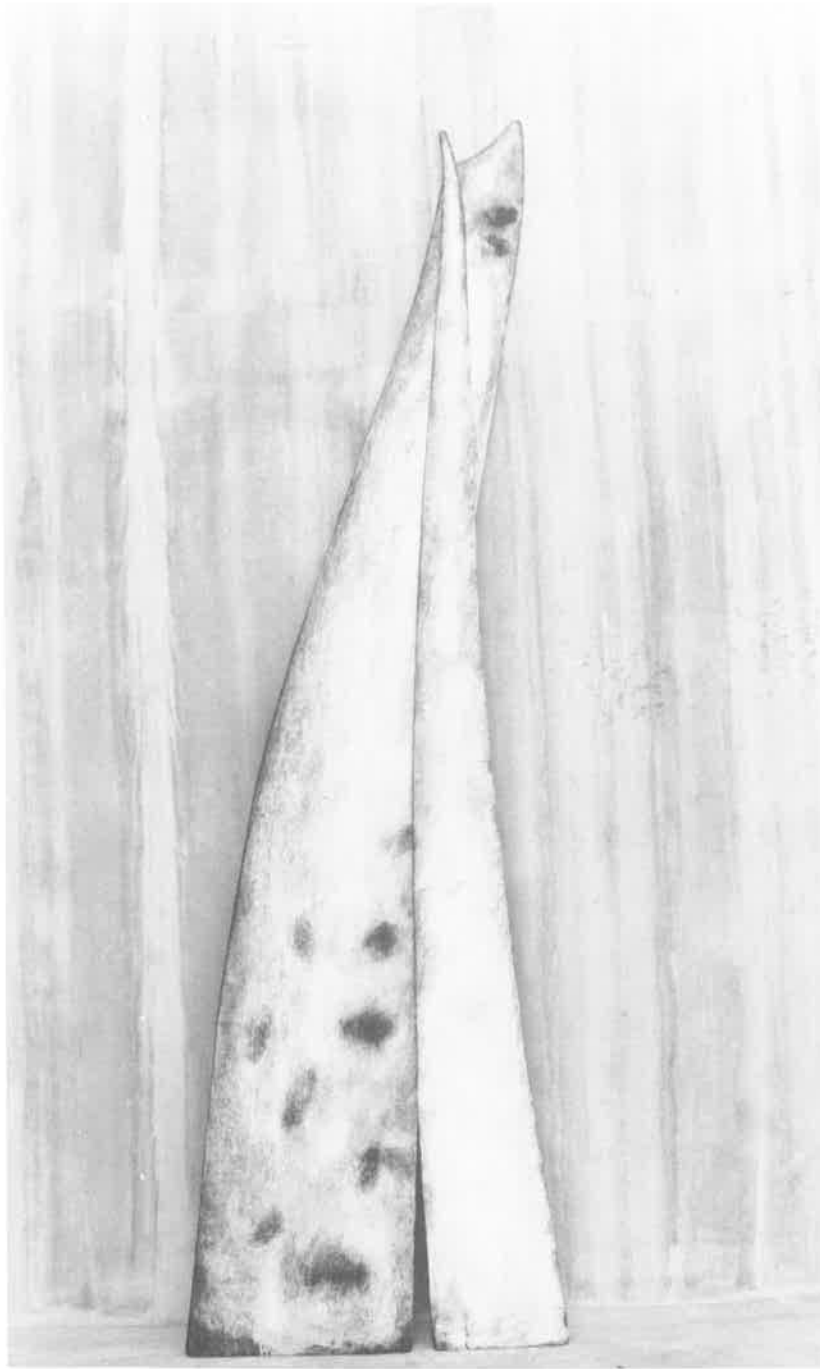


86企画一8 新里 義和 「カイ」 展 11月18日(火) - 12月7日(日) (月曜休廊)

GALLERY TAKUMI



Terebellum terebellum 226×50.3cm 1985

■新里 義和 プロフィール

1961 7月27日生まれ  
1985 琉球大学教育学部美術工芸科卒  
1986 画廊沖縄「表面から物質へ」展  
1986 名古屋 Space to Space 個展  
(OKINAWAN ARTIST WORKS Vol.2)



Family TROCHIDAE 径53cm 1986

## 物・自然・宇宙

### 翁長 直樹

新里義和は、今日沖縄で活躍する最も若い作家達の一人である。ここ数年、何人かの意欲的な若い作家の発表が見られるが、その中でも特異な作風を持つ存在である。

今年7月、『表面から物資へ』三人展、10月名古屋で、そして今度の個展と、作家としては恵まれたデヴューだといえよう。

新里作品に通底するのは、自然との、きわめて繊細な感性による交感の表現であろう。伝統的絵画とは全く異った、〈物質〉性の強調された平面とでも言った仕事を通して、自然の中のエッセンスを取り出そうとする。それ故、作品には、風雨にさらされ、波に洗われ、朽ちて、時を経た素材が使われることが多い。

新里の現在の仕事は大まかに3つに分けることができる。パネルあるいは合板を使った平面的な作品と、切り株などの木口面を使った作品、そしてあらゆる場所から拾い集めてきた木片やその他を素材にする仕事である。

パネルや合板の切り抜きによる作品は、和紙を貼りつけた上に、テンペラ絵の具を彩色する。パネルの場合、彩色された画面はニューマンやロスコなど、カラーフィールドペインティングに相通ずる空間表現を感じさせる。おそらくそれが、「崇高性」の感情を呼びおこし、新里の意図する聖所を連想させるものとなっている。

琉球松などの木口面に彩色された作品は、輪切りにされた切り株が朽ち果てたようにしか見えないが、よく目をこらすと、和紙が入念に凹みにまで、カゼインや膠によって貼り込まれており、やはりその上に、テンペラ、油絵の具の併用によって彩色が施されている。テンペラは良い具合に和紙になじんで、一見ただけでは、単に、輪切りにされ放っておいた木片にしか見えない。それはある意味で自然さを装っており、トリックともいえる。

新里義和にとって流木や様々な「物質」の収集とは、地球上のあ

る一点での邂逅であり、ロマン溢れる行為であろう。近代社会は生きた自然を排除してきた歴史を持つが、我々の自然に対する感性はそれ故ロマンチズムに彩られている。美術史においては常に、生きた自然との出会いが、運動を揺り動かしてきた。それは例えばピカンにおけるアフリカ彫刻であったり、ポロックにおけるインディアンの砂絵であったりしたわけである。我々の内部の自然の表われ方は、必ず象徴の形を取るもので、それは原始彫刻やアニミズムに見られる世界が良く表わしている。ところが先述したように、現代においては我々の宇宙観は自然と断絶しており、日常の中では生きた自然＝制度化されない自然とのふれあいは困難である。そのため人々は危険を冒して山に登り、宇宙飛行をしたりして、自然と一体になろうとするのである。

新里義和は自然に近づき表現するために、呪術的世界に関心を寄せる。沖縄各地の御獄を訪ねて、その場の磁力に触れる。(しかし新里の中で、日常的世界とアニミズム的非日常の世界はどのように捉えられているのだろうか。)

新里の作品には、自然との融合が感じられ、それは日本の伝統的美意識(あるいはアジア的と言った方が良いのかも知れないが)に支えられているように思える。素材に対する受動性があり、作品は自然の中にある「もの」そのものに見えながら、外形に見合う色の塗りが施される。それはきわめて微妙な位相のズレを生じ、「物質」と「平面」の境界での危うい仕事とも思わせる。かつての「もの派」のように荒々しい?物質感を感じられず、展示は平面を意識した方法をとる。しかもそれは画廊全体の空間をもまるで聖所＝御獄の世界に見せてしまうかも知れない。つまり対象とのきわめてアナログな世界が感じられるのである。

さて、新里の作品にはまだかなりの未知の部分が多く曖昧である。それはこれからの作品が明らかにしていくのであろうが、ただ新里における自然が未だ、あまりに作者と近い関係であり、自然との甘い関係であるのが気にかかる。作者の内部と外部の屹立する構造、あるいは外部(つまり認識が困難である)としての自然とこそ格闘して欲しい。我々の自然とは実は隠喩としての自然なのであるから。



Family UNIONIDAE 径53cm 1986